

**新春対談**

ひとを育てる



●日本学術会議会長  
黒川 清

●人事院総裁  
佐藤 壮郎

**佐藤** 黒川先生のお家は代々お医者さんだそうですね。実は私も三代目の地質屋でございます。大学で志望をどこにしようかという時に気がついたら地質学を選んでいたので、先生はいかがでしたか。

**黒川** そうです。家も代々医者でしたから、今の世の中と違って、五〇年前は、最初の男の子だと自分の家の仕事をするとの期待が社会一般にあったと思います。

**佐藤** それで東大にお入りになって、海外に行かれたわけですね。それはどういったきっかけで？

## オープンな北米の大学システム

**黒川** 東大で大学院に行ったり助手をやったり臨床もやって、卒業後七年経った昭和四四(一九六九)年、アメリカで研究をやってみるかなと、二、三年のつもりで行ってたんですけど、行ってみたら結構面白くて、一年延ばししているうちに五年も経ったら帰れなくなりました。

**佐藤** 私も一九七五年にカナダに行きまして。それも非常にひよんなぎっかけて、日本の学会誌に、英語で書いた論文をたまたま認めてくれて、来ないかという話になって。いい経験になりましたね。どこの馬の骨かわからんけれどもいい論文書いたので呼ぶというのは非常にフェアですね。

私の場合はカナダに二年ほどいて帰って来たのですが、先生は長い間いらっしやうて。

**黒川** そうですね、五年もすると、あの頃だと日本にはもう帰って来られません、やっぱり「タテ」の序列の世界だから。アメリカでは研究で行ってましたから、成果を着々と出していかない

と次の年の契約はどうするという話になります。それに元々医者だったし、周りも医者ですから、免許を取らないと一人前じゃない。

それで猛勉強して医師免許や専門医資格で取れるものはみんな取って、回診や講義、診療をしました。それらで評価されるというんな所から誘いが来て、十年で内科の教授になりましたから、そういう意味じゃアメリカでは非常にフェアですね。頑張る人にはそれだけのことがあるのはすごいことと思いました。

**佐藤** そうなんですよ。それで一五年後に日本の大学に帰られていかがでしたか。

**黒川** 一九八三年頃に、帰って来るようにと口説いてくれる人がいて、ただ向こうで教授だからといっても日本ではそんな扱いしてくれないよと、助教で呼んで下さったんです。子供のこともあり、一、二年日本にいるのも悪くはないかなと帰って来たら、学生さんは向こうにも負けず劣らず優秀。だけど医者になつて、三十歳半ばくらいになると、みんな疲れて生き生きした感じがなくなる。これは教育の問題だと思つてね。ちょうど五年目に東大の教授に選ばれて、ますます帰れなくなりました、ということですよ。

**佐藤** おそらくその時代から大学が変わり始めたのでしょうか。私も卒業する際、教室に残らないかと言われたんですけど、窒息しそうな雰囲気でした。とうていなじめそうもないので国の研究所に入ったのです。

**黒川** そうですね。日米両方の大学で教えていると、社会的システムからアカデミックコミュニケーションそのものの評価、それから人生の価値観などいろいろ違うことがよくわかる分、米国で大学も一つの有機体を形成しているというのは非常にいいなと思つてるんですけど。

**佐藤** 向こうの大学で一番驚いたのは、自分の大学出身者は大学院には取らないし、それから教授にしないんですね。必ずどこか他の大学に出る。もう一つはいったん社会人になって、また戻って来る人達が非常に多い。

**黒川** あのシステムの素晴らしいのは、大学に入って学生がどういう格好になって出て来るかを、よそに必ず行かせて、国中、いや世界の自分達の仲間に比べさせる。プロダクトを評価されるから、先生も大学も自分達がどう評価されているかが非常に大事なわけです。自分の信用の問題ですから。いい大学であればあるほど要求水準が高い。すごいなあと思いますね。

## 欠けていた戦後の国作りのビジョン

**佐藤** この機会にぜひ先生のご意見を伺っておきたいと思っただのは、人の育成の問題です。人事院は公務員試験を実施しているわけですけど、公務員試験は客観的で成績主義でなければいかんとなると、どうしても知識中心になってしまうんですね。例えば人間性とかリーダーシップとか、人間としての包容力とか教養の深さなんていうのは定量的に計れるものじゃないし、判定者の主観が入ってしまう。そこらへんが私どもの悩みなのですが、先生はどのようにお考えですか。

**黒川** そうですね。日本では当たり前だと思われているけど実は当たり前じゃないことがたくさんあるわけですね。その一つが今言われた公務員試験で、あくまでも人間の能力の一片を見るにすぎないんだけど、それがフェアかということですね。

例えば、徳川時代の二五〇年の鎖国の後、明治維新になって、ヨーロッパの帝国主義によって開国を迫られて、昨午が日露戦争

開戦百年なんです。明治維新からそこまでは日本は非常にうまく行ったと思います。けどその時から、それまでのサクセスストーリーのせいで自分達のパラダイムが正しいと思ってしまっただけで、これを直せないまま満州に突っ込んで行った。欧州が世界中を植民地化していた頃に日露戦争に勝ったことで、独立を守ったというメッセージが二十世紀の世界を変える大きなきっかけになったのは誇るべきことだけど、そこから先の正統性のある道が客観的に見えなかったんですね。

**佐藤** そうなんですね。

**黒川** そこから第二次大戦までずっと来て、例の「失敗の本質」などいろんな本がありますね、教訓を学ばないで負ける。戦後もまたいい時代が来ますけど、これも冷戦とアメリカに占領されたという、自分たちと全く関係ない外の要因が良かったわけです。

徳川時代に培われた秩序は非常にうまく働くんですね、みんな勤勉だし、識字率が高いし、リーダーの言うことは聞くし。しかし戦後は、自分たちで大きな枠組を作ったのではなかったわけです。

だから、一五年くらい前までは「ジャパン・アズ・ナンバーワン」と言われたり、「政産官の鉄のトライアングル」と言われたりしたこと日本人が疑問を持たなかったのは、極めて認識不足だなと思います。日本は *inhomogeneous*、純血主義で、それが今は完全に弱みとなってますね。日本では「人間つまり「世間の人」って意味だから、常に世間のどこにポジションがあるかでしか人を評価できなかった。

そういう意味では、もつと多様な能力を、それぞれの得意技を伸ばすという「個人」の機能的な有機体にしていかなくちゃいけないと思います。言うは易いんだけど、「人間」だからね、そこで



黒川 清(くろかわ・きよし)日本学術会議会長

昭和11年生まれ

昭和42年 東京大学大学院医学研究科修了(医学博士)

東京大学医学部助手、ペンシルバニア大学医学部助手、UCLA 医学部上級研究員、University of Southern California 医学部準教授、UCLA 医学部教授などを経て、昭和58年東京大学医学部助教授、平成元年同教授、平成8年東海大学教授・医学部長、平成9年 東京大学名誉教授、平成14年東海大学教授・総合医学研究所長、平成16年から東海大学教授(非常勤)、東京大学先端科学技術研究センター教授(客員)。平成15年7月から現職。

す。

佐藤 そうでしょうね。僕なんか、人の選抜というのは客観性には限界があるから、しかるべき人にその人の主観でいいから選抜してもらえばどうかと、乱暴な言い方をしたりするんですけど、なかなか現実的に難しい。

黒川 そうですね。特に戦後の場合は、冷戦構造下で、朝鮮半島に続いてベトナムという隣近所で持続的に「大火事」があったという有利な条件で経済成長しましたから、国家ビジョンなど考

える必要がなかった。

日本は規格大量生産による工業化は非常に上手だったけど、それに都合がよかったのが終身雇用であり、年功序列であり、大きな退職金であった。「四〇年体制」です。このため、会社に入っつつがなく定年まで迎えようという話になっちゃう。

加えて、徳川時代からの「お上意識」があり、公務員は自分達より「お上」であるという「天下り」という言葉があるほど。こんな馬鹿げた社会はないということにあまり疑問を持っていないんですね。

### 明治以来の inertia

佐藤 実は、選抜育成の方法を含めて、今公務員制度を変えようとしているんですがこれがまた非常に難しいこととして。独法化したりして減っておりますが、それでも一般職の国家公務員だけで三〇万人おりますから、その inertia(慣性)は大変なものでしてね。

物理的に言う inertia というのは、速度×質量ですけども、人間の世界では、速度×質量×時間なんです。

黒川 そう、時間です。おっしゃる通りです。

佐藤 今の公務員制度はどこに出発点があるんだと考えてみますと、やっぱり明治政府なんです。それから連続として百年以上続いているから、inertia がべらぼうになりました。今、公務員制度改革の焦点となっているのは、年功序列制をやめて能力実績主義を導入しようということ、天下り規制を見直そうということですが、これは問題の一部であって全体ではない。

私自身は、本当に変えなければいけないのは各省庁のセクショ

ナリズムとキャリア制度だと思っておりますが、そもその出発点は明治政府なんですね。あの頃は、各省庁は大臣を通じて議会とも独立に、直接天皇を輔弼するということで、そこで割拠主義が生まれたんですね。それが今まで引き継がれて来た。

それからキャリア制度は、まさに高等官という身分制度から出発したんですね。新しい憲法下では、古い官僚制度を全部ご破算にして、議会のコントロールを受け、議会から指名された総理大臣が内閣を作り、行政各部を指揮監督するという図式となった。その際に身分制度も全くなしちゃったはずなんですけど、それが運用の面で残ってるんですね。だからそこを今になって直そうとすると、制度上明文化されていない分だけ非常に難しくなってます。

**黒川** なるほどね。確かにおっしゃるように、明治の時はヨーロッパの帝国主義に囲まれているということで、新しい国として独立するのに大変苦労したと思います。明治維新の政府のリーダーは薩長の人が多いんですけども、士農工商の身分制がある中で、秩禄処分によって元々持っていた扶持の身分を取ったことはやはり大英断でした。

それから天皇の下で非常に官僚制度がうまく行ったんですけど、戦後の民主主義の場合は、アメリカの民主主義システムを導入しようと思ったけど、ちょうど冷戦になったので、やっぱりその国に合った官僚を使わないとまずいとなった。国民の意識にも、今までの官僚は天皇の官吏だったことが、お上意識として残っているとだと思いますね。

**佐藤** ただ、明治時代の官僚システムは、戦後復興期にはかなりうまくワークしたんですね。なぜかと考えてみますと、例えばセクシヨナリズムの問題にしても、当時は全てはほとんどゼロから再出発しなくてはいけませんでしたので、個々の利益の和は

全体の利益になったんですね。例えば農業でも製造業でもダムや道路を作るのでも。

それが冷戦が解消し、また経済成長がある程度頂点まで達して経済大国と言われるようになって、今度は限られた資源の最適配分をしなきゃいけないようになった。それがうまく行かないんですね、セクシヨナリズムのせいで。

**黒川** おっしゃる通りです。冷戦構造も朝鮮戦争も日本にとってはたまたまなんだけど、そういう枠組の中では徳川時代からの日本の精神構造とシステムが非常に良かったと思いますね。それでぐつと経済成長した時に、上から指導する民主主義というか、資本主義が下からのものに変わるチャンスを選したんですね、これは森嶋通夫先生が書いてる。戦後はどういう国にするかという議論がなかったんですね、ある意味でアメリカが決めてたわけだから。冷戦がなくなったからさあどうするんだって話で、急に困っちゃった。

**佐藤** それに行政も経済も全てが国際競争の中に巻き込まれちゃいましたからね。そうするとリーダーシップが一番大事になるはずなんですけれども、なかなか政治が行政に指導力を発揮できないんですね。我々も何とか変えていかなきゃいけないんですけども、さっき言ったように非常に *inertia* が大きいものですから、どこから手をつけていくかとなると難しいんですね。

**黒川** そういう意味じゃ外国と比べても、日本人はみんな真面目だし、よく仕事をする。だけど、「リーダー」達は戦後の成功は自分たちが頑張ったからだと思ってるんだけど、実は大きなフレームのおかげだったってことはなかなか考えられていない。

明治維新は、新しい国家像を作りながら西洋からいかに独立出来るかを真剣に考えていた。それに対し、戦後のサクセスストーリーは、日本人のいい質が活かされていたとは思うんだけど、大

きなビジョンを持つという人は育てなくて済んだという点に今の問題があると思います。

## 日本学術会議の政策提言

**佐藤** 日本学術会議では、いろいろな提言をされてますね。

**黒川** ええ。それをどういうふうに政策化するかですね。例えば、最近も中国の遺棄化学兵器の処理問題で二つ提言を出している。もちろん内閣府も入って、データももらって一緒に提言してますけど、そういうのを政府が出すのはやりにくいんですよ。学術会議が出してるから意味があるんです。

日本では役所がみんな政策を作ってたでしょう。でも役所は政策を執行するところなんです。政策は誰が出すのか、それを決めるのは立法府で、僕らはその政策の選択肢を出すわけ。例えばカンクンでのWTO会議の時も、農水大臣の諮問を受けて、森林や農村の多面的機能に関する答申を出していたんです。亀井農水大臣がWTOに行かれて、『農地についていろんな諮問をしたところ、学術会議から答申をもらった』って言ったら、向こうからすごく尊敬された』っておっしゃってました。

外国ではそうしたアカデミーが答申するプロセスが当たり前だと思ってる。そういうプロセスを日本でももつと当たり前前のこととして築くのは大事だと思います。

役所の人達ってすごく熱心に仕事をするんです。自分達が政策作って国を動かすと思ってるんだけど、本来はそうじゃない。だから官邸の政策立案機能を強くしなくてはいけないんだけどまだブレインがなくて、他方で役所は少し萎縮してるという、今ちようど移行期で難しい時期ですね。

## アジアで信頼される国に

**黒川** ちようど日露戦争から百年、大きな歴史の流れからいくと日本は非常に成功したんです。たくさんの方が二十世紀に独立して来たんだけど、今世界の人口は百年前に比べて四倍の六四億になってますね。そのうちの六〇%がアジアにいる。この人口がこれからの地球の環境問題やエネルギー、食糧に及ぼす影響は猛烈に大きいですね。

ECが二五カ国くらい一緒に来てる、アメリカ一人勝ちじゃない対抗勢力を作り始めていますね。日本のこれから五十年のミッションというのは、いかにアジアで信頼される国になるかが一番大事です。単なる成金じゃなくて品格のある国にならなくちゃいけない。だから今度の第三次の科学技術基本法もそうだけど、そのために科学技術や教育があつて、将来の人材の育成が一番のミッションじゃないかと思ってます。

**佐藤** おっしゃる通りですね。しかし行政だけではなかなか難しゅうございますね。

**黒川** そのためには、学術会議もそうだし学者のコミュニティが日本国内外の社会に対して、もつと責任ある発言をどんどんすべきだと思います。

全ての国に無料で与えられるものはその人と空気だけなんです。だからどういうふうに人を育てていくかが国の明暗を決めます。今の世の中では大きな世界のパラダイムがまだ見えませんが、グローバルな環境問題とか人類は維持可能かという問題に向けて科学技術や教育の戦略と政策がある。こうした人材の育成を通して、どうやって日本がアジアでの信頼を構築するかです。

日本はイスラムともいい関係を築いています、特にアジアのマ

レーシアとかインドネシアね。そうした国々の一人一人の人間とのネットワークをどう作っていくか。特に若い時が大事で、大学生の時なんて半年くらいどんどんそういう所へ行かせるとか。その人達が五年、十年すると、同世代のネットワークを作っていく社会になってくると僕は思っています。

## 身近な大人の影響とリベラルアーツ

**佐藤** そういう意味でも、人間のコミュニケーション能力は非常に大事ですね。私が心配しているのは、日本人は、外国に対してもそうなんですけど、異なる世代に対するコミュニケーション能力がものすごく低下していることですね。だから、小学生・中学生で一番大事なのは、日本語でのコミュニケーション能力を育てることだと思います。

**黒川** おっしゃる通りです。日本語教育が猛烈に大事なんです。特に小学校・中学校では、もっと日本語の時間を増やさなくちゃいけない。それと、やっぱりコミュニティ、地域社会の連携です。大学がまず中心になってもいいし、それから地域産業、それからリタイアした人達ももっと参加すべきなんです。別に授業をする必要はなくて、総合学習などいろいろやってもらえばいいんだけど、地域社会が子供達をみんな育てるっていう意識がものすごく大事だと思います。

実は、学術会議が音頭取りをして、各地域の大学が中心になって、学部や院の学生、それから先生達もOBも、みんなが地域の小中学校の先生達をバックアップするという連携を、大学の一つの座標軸としてくれと言ってるんです、自分達も手伝うよと。

**佐藤** それがコミュニティの概念なんですね。

**黒川** そうです。いろんな多様な大人達を小さい頃から見てるっていうのは、将来に向けてすごく大事だから。

**佐藤** 先生と私はほとんど同じ世代だと思うんですけど、中学高校で古文と漢文が必修でしたよね。あれは非常に良かったと思うんですよ。

**黒川** 漢文をやってプラスなのは、理屈はわからなくとも、その後ろに二千年、三千年の中国の歴史の思想、哲学のような「香り」があるんですね。そして古典は常に大事なんです。

明治維新からそうだけど、やっぱり最初の四、五年の教育は読み書きそろばんです。中学生の頃は、自分は何をしたいのかはあまり意識してないんだけど、その年代に会った先生とか大人によつて、何かのきっかけをもらうことが大事なんです。

**佐藤** 頭の片隅に残るだけいいんですね。

**黒川** そう。そうすると、元々あった自分のポテンシャルに目覚めて、その方面へ進んで行く人もいる。いま武道がすごくブームでしょう。クラーク先生がいたのは八カ月なんですけど、あの時学んだ新渡戸稲造とか内村鑑三は一四歳くらいです。だからその頃に会った人に、理屈はわからないけど何かを感じるのです。これが大事なのです。

**佐藤** 当時のそういう学校に入ってた人は基本的な漢学の素養があつてはじめてクラーク先生の信号を受け止められたんじゃないかなと。今はそれはございませんからね。

**黒川** 生まれつき人間にはいろんな才能があつてポテンシャルがあるんです。いろんな引き出しがあるんだけど、どの引き出しを開けるかは、読み書きそろばんを小学校くらいはびちつとやっておいて、あとはいろんな人に出会うことです。得意なこと、好きなことをやっているのと疲れませんかからどどん先に進めよう。そういう世の中にしたいい。



佐藤 壮郎(さとう・たけお)人事院総裁

昭和13年生まれ

昭和39年 東京大学大学院数物系研究科修士課程修了(地質学)

昭和48年 理学博士

昭和39年工業技術院地質調査所採用、平成6年地質調査所長、平成8年工業技術院長などを経て、平成12年人事院人事官、平成16年4月から現職。この間に、昭和49年から51年までカナダ地質調査所、カナダ・メモリアル大学、昭和51年から52年までメキシコ・ソノラ大学。

**佐藤** 先生は大学教育について、リベラルアーツが非常に大事だとおっしゃってますね。実は、公務員の研修でも、古典を教材にしたコースを作ってるんですよ。例えばデカルトとかアリストテレス、松尾芭蕉を読んで、グループで対話し思索するというのを。いい歳をした公務員が旧制高校のような議論をしているのはどうかないという気もするんですけども、いま大学で教養学部はほとんどなくなってる、リベラルアーツを教える機会がなくなってる。ですから、古典なり一般教養なりをどこで学ぶかは非

常に大きな問題ですね。

**黒川** そうです。なぜリベラルアーツかという話ですが、旧制高校を知ってる人はあの頃は良かったとおっしゃるんですけど、昭和二〇年で大学進学率はたった三%です。だから国民も大卒者はエリートだと思っていたけど、今では教育の在り方と大学のミッションそのものが全く変わって来ているわけです。

先日「明治維新までは生まれた家で身分が決まっていた。明治からは入った大学で決まっていた。だから大学へ入ったら勉強する必要がなかった。しかしこれからは大学出てなんぼだということになる、とすれば卒業生を社会へ、そしてよその大学へ出さない限りうまく行かない」と話をして河合文化庁長官としていたんです。

その意味では、歴史にしても、今の「エリート」の人達は、偏差値の高い大学の入試に必要な歴史しか勉強してない。大学に入ってから勉強が本当に大事なんです。一つの哲学体系は人間の英知の歴史ですから哲学の勉強、それから近代日本史、世界史ぐらいは必須ですね。今、MITとかハーバードとかみんなそうだけど、一年間は全ての人に生物学が必修です。米国などはそうなの。日本は大学の入試の文系・理系でもっと早い所で分かれるでしょう。猛烈に時代遅れですね。やっぱりリベラルアーツとして、歴史を一つ、哲学を一つ、あとこれからの世の中だと生物学を一年はやらなくちゃいけない。あとは選択しながら専攻を決めていく。だんだんそういう体系が変わって来ると思いますが。

**佐藤** 公務員の採用試験でも、何を問うのかは非常に難しいですね。だから現状は、論文試験も面接もやってますけど、主体は学校で学んだ知識になってしまってますね。

**黒川** 今までの教育は大学に入るのが目的で、入って勉強す



るのが目的だったわけじゃないから。

**佐藤** それで面白いのは、試験委員にお願いしている大学の先生方に聞くと、「いやあ公務員試験があるので学生はみんな勉強するからいいですよ」って。(笑)

**黒川** しかし目標が違うでしょう、試験も大事ですけどね。

さっきおっしゃった漢文は、中国の歴史や考え方を体系的に勉強しているわけじゃないんだけど、その裏の話を先生がいろいろしたりする。そういう話が大事ですね。それがいいのはもったいないと思います。

## 若いうちに海外へ

**黒川** それからもう一つは、中学高校でもいいんだけど、特に大学へ行ったら、半年くらい外国へ行った方がいいですよ。なるべくアジアとかいろんな所へ行行って欲しい。それも単位に認めただ方がよっぽどいいんじゃないかと思ってます。

もう一つは、一緒に入った人が四年後に一緒に卒業する必要はない。うちの娘はアメリカの大学へ行って、こんなに勉強ばかりしてたまらんとって、一年休んでアフリカに行ったり、いろんなことします。そうしたことを認める学校や社会が出来てくるといいと思うんですね。今までは年功序列社会だから、なるべく早く会社に入って同級生と一緒に行かないとマイナス点だったけど。

それが今崩れ始めてるのはいいんだけど、最終的には大きな退職金制度をどこかでやめて、年金にもポータビリティを持たせる必要がある。退職金は十年程度で頭打ちにすれば、三十歳くらいで外から入ってくる人もいるし、十年は続けてまたよそで働く人

もいるっていう形になって、明るい人達が育つと思いますね。

**佐藤** さっきのキャリアシステムの話とも関係するんですが、今、大学卒業時点で公務員の採用試験を行い、いわゆるキャリアは、I種試験、しかも法文系の試験合格者の年間三百人程度がその時点で幹部候補生になって、その後もほとんどそのまま昇進していくんですね。それ以外のII種・III種で受かった人達はほとんど局長とか次官になれない。今それが問題視されているんですが、では、さていつの時点で幹部候補生を選抜すべきなのかは、いろいろな議論があつてなかなかまとまらないですよ。

どういう選抜制度を役所の中に作つたらいいのか、もしご助言があればお願いします。

**黒川** いや、わからないけど、大学進学率がたつた三%だった頃と同じようなシステムをいま民間企業がやったら駄目になってしまう。だから自分達の評価じゃなくて、外の評価を受けるようにしないと、海外に出た時に国の信用問題になってしまう。それはすぐくまずいと思いますね。

民間企業も、今までは「政産官の鉄のトライアングル」があったから、同じように年功序列だったんです。だけど本当に困つてくると、プロ野球もそうだけでも、ライブドアとか楽天とかが出て来るといように、世の中が変わつてくるのは早いですよ。

私がよく冷やかすのは、野茂が十年前にアメリカへ行つたのがよかつたのだと。二十年前だったら注目されないんだけど、十年前だとテレビのライブでみんなが見ちゃうから、素人は評価はできなくても何か違うと思うわけです。プロの人達は違いが見えるから、伊良部や佐々木、新庄やイチロー、松井が行って活躍すると、日本はみんな元気になる。そういう意味じゃ、たつた十年ですよ、野茂が出てからこういうふうにパラダイムがぐつと変わったのは。それだけ情報が開かれてるから。

十年前が非常に画期的だと思うもう一つのいい例は、九五年にあつた都銀はいま一つもないんです。それだけグローバル化って早い。だから出来ない理由なんて言っていたら、その遅れを取り戻すのは大変ですよ。

**佐藤** おっしゃることはよくわかるんですけど、役人、行政の世界には市場からのフィードバックもないんですね。パブリックからのフィードバックも、最近はかなり役所も意識していますけれども、弱いんですよ。結局内部で完結している世界なんですね。

**黒川** そうですね。日本人は非常に勤勉だし、素晴らしい人達だけど、国の大きなビジョンに向かって政策を作っていくためには教育や科学技術が大事ですね。総裁もそうだけど、長く外国にいて一人で生きていくというプロセスを経ると、急に日本がよく見えるようになります。そういう人をもっと増やしたいと思います。役所も、外をたくさん見てそうした意識を持つ若い人達が、マジョリテイじゃなくても五から十%にでもなってくると、どんどん変わっていくでしょう。

**佐藤** そうですね。しかも本当はフリーの状態の時に見るのが一番いいですよ。役所に入ってから行くと、へその緒が霞が関につながっていますから。

**黒川** そう、日本人の常識では、一番高くて美しい山は富士山と思ってるんですけど、若い時に海外に行かせると、エベレストとかいろいろあることがわかる。あれは高すぎて俺は嫌だって言う人もいるけど、登る人もいる。なにも山は富士山だけじゃないとわかってくるわけです。とすれば自分を知る。

有名進学校の優秀な学生が東大を受けないでプリンストンとかMITに入ったと。先生は「東大にまず入ってからにしたらどう

か」と言ったら、その生徒が「レアルマドリッドからオファーがあるのに何でジュビロ磐田に行かなくちゃならないんだ」と言ったとかいうけど、けだし名言だなと。そういう人が5%くらいになつてくると、日本もぐつと変わつちゃうと思いますね。それが教育だと思えます。

本当に素晴らしい人達がたくさんいる。今の若者達は意外に捨てたものじゃないですよ。今度のオリンピックだって金メダル一六個でしょ。東京オリンピックと同じだけど、東京では女性の金メダルはバレーボール一つです。今度は半分以上が女性。それから北島などもそうだけど、組織のためじゃないんです。一人の力、個人のために勝つというのはすつかり価値観が変わつて来ましたね。立派なものです。

**佐藤** そういう人達が公務員試験を受けてくれればいいんですけどね。(笑)

**黒川** そういう人達が確実に少しずつ増えてます。フリーターというの言葉が悪いんで、むしろかなりの若者が自分の本当にやりたいものは何かを探してるんじゃないでしょうか。就職しても定年までずっと同じ会社に勤めていることはない。そのへんの雇用制度を変える必要があると思います。

**佐藤** 私どもも、試験にせよ、今おっしゃった雇用制度にせよ、時代の変化に合わせてどう変えていけばいいのか、しっかりと考えていきたいと思えます。

**黒川** そうですね。人材の育成・適材適所、これは日本の将来の根幹です。私は大学とか科学の方でやりますので、総裁にも是非やっていただきたいと思えます。

**佐藤** 公務員の世界で努力をさせていただきます。本当に今日はどうもありがとうございました。